

秋彼岸追悼廻向の文

さわや

天高く気爽かにして心澄み身また清らかなり。伏

おもんみ

たいしやう

して惟るに法身大日如来といっぱ体性常住にして

むしむしゆう

りちふへん

ふらい

ふこ

無始無終なり、理智普遍にして不来、不去なり。

ほっかいぐう

そんしゆ

しまん

しよぶつみなかひ

こおむ

法界宮の尊主なるが故に、四曼の諸仏皆加被を蒙

ちしよいき

しやうしゆうごごご

いじん

り、智処域の教示なるが故に五部の聖衆悉く威神

たす

しか

すなわ

かつごう

を輔く。然れば即ち、信心渴仰の水、澄むときんば、

ごちえんみやう

あきら

やど

かんねん

どこ

五智円明の月、明かに影を宿し、観念修行の床静

さんもうめいあん

れい

たちま

かなるときんば、三妄迷闇の靈、忽ちに消える。

じやうさつ

本日、琵琶湖湖南の淨刹 東方山安養寺観音堂

こうげ

ちややく

ひやくみ

ごか

きぜん

そな

において、謹んで香花 茶菓・百味 五菓の稀膳を備

しよしやうれい

へて、ご参詣の檀信徒の諸々靈の供養をせんが為、

秋彼岸会を嚴修する。

安養寺の寺名のとおり安養とは九品安養の臺をさ

くぼん

うてな

す尊き仏の呼び名にして仏の世界最上の位くらゐなり。こ

の世を此この岸、此岸しがんといい、仏の座います安養の世界を

彼岸と呼ぶ。されど死をもつてこの彼岸に到達するの
みならず、生きたこの身において彼岸に到るには、仏

法の船に乗る必要あり。仏法の船とは、一つ、布施ふせ、

一つ、持戒じかい、一つ、忍辱にんにく、一つ、精進しょうじん、一つ、禅定ぜんじょう、

一つ、智慧ちえの六つの徳目なり。六波羅蜜ろくはらみつのみ教えに

して彼岸の岸へと渡る仏道の要諦ようたいなり。真言宗宗祖

弘法大師はかけがえないこの命を生かし。この世にお

いての暗闇くらやみを払いのけ光明に照らされし眞実の道

そくしんじょうぶつ
「即身成仏」を説き示し賜うものなり。

先祖を敬い、祖先の霊を供養し、共に日頃は多

忙にして心身ともに諸々の浮きことに翻弄ほんろうされる現実

を見定めて、秋彼岸の好期を期に弘法大師のみ教えおし

とともに如来大悲のもとに身を安んじて日常の事柄

を精進努力して心の廻心をはかるを願うものなり。
えしん

さて、わが国の仏教音楽の源流は声明・梵唄なり。
しょうみやう ほんばい

安養寺熊谷俊亮任職は青年僧時代から音楽を極め

げんみやう

ころ

いちず

なかんずく玄妙な真言声明のみ心に接し、一途に
研鑽を重ねられる。身も心も洗われて、密厳浄土は
かくなりとの思いを深くされる。このたびの法要にお

さん

かだ

きよく

じゅうろ

いても讚・伽陀などの曲へ一山住侶とともに惜しみな

ひれき

ていおん

きゅう

しょう

かく

ち

う

く、その真隋を披瀝。低音から宮・商・角・徴・羽の
五音階がひとつにとけ合う自然の音楽に満堂の参詣
者の内面は深くゆさぶられる。誠にその微妙な音色

おう

おう

は、多くの音楽がもつ王の王にして、まさに仏心の

けんげん

かな

顕現を叶うものなり。さらに加えて大師流慈苑講・

そうだいぼんえい

とな

山下登美宗大梵詠を筆頭に講中の面々の詠えるご詠

しら

さんか

じょうそう

かんよう

歌の調べは常に仏道を賛歌、情操を涵養して仏の道

こせう

えと誘い玉えるを喜びとす。

伏して乞う。家内安全 諸人快樂
乃至法界 平等利益

平成二十七年九月二十三日

京都府向日市寺戸町

亀光庵住職

土口哲光敬白